

# 猫吉親方

またの名 長ぐつをはいた猫

ペロー Perrault

青空文庫



むかし、あるところに、三人むすこをもった、粉ひき男こながあり  
 ました。もともと、びんぼうでしたから、死んだあとで、こども  
 たちに分けてやる財産ざいさんといつては、粉ひき白をまわす風車ふうしゃと、  
 ろばと、それから、猫一ねこぴきだけしかありませんでした。さてい  
 よいよ財産を分けることになりましたが、公証人こうしょうにんや役場の書し  
 記よきを呼ぶではなし、しごくむぞうさに、一ばん上のむすこが、風ふ  
 車うしやをもらい、二ばんめのむすこが、ろばをもらい、すえのむす  
 こが、猫ねこをもらうことになりました。すえのむすこは、こんなつ

まらない財産ざいさんを分けてもらったので、すっかりしよげかえってしまいました。

「にいさんたちは、めいめいにもらった財産をいっしよにして働けば、りっぱにくらしていけるのに、ぼくだけはまあ、この猫をたべてしまつて、それからその毛皮で手袋をこしらえると、あとにはもうなんにも、のこりやしない。おなかかへつて、死んでしまふだけだ。」

すえの子は、ふふくそうにこういいました。すると、そばでこれを聞いていた猫は、なにを考えたのか、ひどくもつたいぶつた、しかつめらしいようすをつくりながら、こんなことをいいました。「だんな、そんなごしんぱいはなさらなくてもようございますよ。」

そのかわり、わたしにひとつ袋をこしらえてください。それから、ぬかるみの中でも、ばらやぶの中でも、かけぬけられるように、長ぐつを一そくこしらえてください。そうすれば、わたしが、きつとだんなを、しあわせにしてあげますよ。ねえ、そうなれば、だんなはきつと、わたしを遺産いさんに分けてもらったのを、お喜びなさるにちがいません。」

主人は猫のいうことを、そう、たいしてあてにもしませんでした。けれども、この猫がいつもねずみをとるときに、あと足で梁はりにぶらさがって、小麦粉をかぶって、死んだふりをしてみせたりして、なかなかずるい、はなれわざをするのを知っていましたから、なにかつごうして、さしあたりのなんぎを、すくってくれる

くふうがあるのかもしれない、とおもつて、とにかく、猫のいうままに、袋と長ぐつをこしらえてやりました。

## 二

猫吉親方<sup>おやかた</sup>は、さつそく、その長ぐつをはいて、袋を首にかけました。そして、ふたつの前足で、袋のひもをおさえて、なかなか気取ったかっこうで、兎<sup>うさぎ</sup>をたくさん、はなし飼<sup>が</sup>いにしてあるところへ行きました。そこで、猫は、袋の中にふすまとちしやを入れて、遠くのほうへほうりだしておきました。そこから、袋のひもを長くのばして、そのはしをつかんだままじぶんはこちらに長

ながとねころんで、死んだふりをしていました。こうして、まだ世の中のうそを知らない若い兎たちが、なんの気なしに、袋の中のものをつたべに、もぐりこんでくるのを待っていました。あんのじよう、もうさつそく、むこう見ずの若い、ばか兎が一ぴき、その袋の中へとびこみました。猫吉親おやかた方は、ここぞと、すかさずひもをしめて、その兎を、なさけようしやもなくころしてしまいました。そうして、それを、えいやつとかついで、鼻たかだかと、王様の御殿へ出かけて、お目どおりをねがいました。

猫吉は、王様のご前ぜんへ出ると、うやうやしくおじぎをして、

「王様、わたくしは、主人カラバこうしやく侯爵からのいいつけで、きよう狩場かりばで取りましたえものの兎を一ぴき、王様へけん上にあが

りました。」

カラバこうしやく侯爵しやくというのは、猫吉がいかげんに、じぶんの主人につけたなまえですが、王様はそんなことはぞんご存じないものですから、

「それは、それは、ありがとうございます。ご主人に、どうぞよろしく御礼をいっておくれ。」と、おつしやいました。

猫吉は、ばんじうまくいったわいと、心の中ではおもいながら、「はいはい、かしこまりました。」と、申しあげて、ぴよこ、ぴよこ、おじぎをして、かえつて来ました。

そののちまた、猫吉は、こんどは、麦畠の中にかくれていて、れいの袋をあけて待っていますと、やまどりやまどりが二羽かかりました。



それを二羽ともそっくりつかまえて、兎とおなじように、王様の所へもつて行きました。

それからふた月三月のあいだというもの、しじゅうカラバこうし侯やく爵のお使だと名のつては、いろいろと狩場かりばのえものを、王様へけん上じょうしました。そしてそのたんびに、猫吉はお金をいただいたり、お酒を飲まされたり、たつぷりおもてなしをうけるうちに、だんだん王様の御殿のようすが分かってきました。

三

ある日のこと、猫吉は、いつものように狩場のえものをけん上

しに行きました。すると話のついでに、きょう、王様が美しいお姫さまをつれて、川へ遊びにお出かけになるということを聞きこみました。そこで、猫吉は、さっそくかえつて来て、主人に話しました。

「もしもし、だんなが、わたしのいうとおり、なんでもなされば、あなたは、じきしあわせになりますよ。それもたいしてむづかしいことじゃないですよ。だんなはただ、きょう、川まで出かけて、わたしのおしえるとおりの所へ行つて、水をあびていればいいんです。そうすれば、あとはばんじ、わたしがいいようにしますからね。」

カラバ侯こうしやく爵は、そう聞いても、なにがなんだか、ちつとも

わけが分かりませんでしたが、なんでもかでも、猫吉のいうとおりにしました。さて、ちようど猫吉の主人、すなわちカラバ侯こうし爵やくが、水につかつてからだを洗っているとき、そこへ王様の馬車を通りかかりました。すると、猫吉はきゆうに、火のつくように、かなきり声をあげてさけびたてました。

「助けてください。助けてください。カラバ侯こうしやく爵やくがおぼれそうです。」

王様は、このさけび声を聞くと、なにごとかとおもつて、馬車の窓から首をお出しになりました、見ると、しきりにどなっているのは、これまでに、たびたび狩場かりばから、いろいろと、けつこうなえものを持ってきてくれた猫なので、王様はおそばの家来けらいに、

はやく行つて、カラバ侯こうしやくを助けて申せ、といいつけました。

家来が、いそいで川へおりて行つて、カラバ侯こうしやくを引きあげているあいだに、猫吉は王様のところへ出かけて行きました。

「わたくしどもの主人が、川につかつて、からだを洗つておりますと、わるものがやつて来たのでございます。主人はずいぶん大声で、なんども、どろぼう、どろぼうと申しましたのですが、とうとう、わるものは、着物をぬすんで、もつて行ってしまいました。ですから、すぐに着る着物がございません。」

猫吉は、こう王様にうったえました。じつは、その着物は、大きな石の下にかくしておいたのです。けれど、猫のいうことが、さもほんとうらしく聞こえるので、王様は、御殿の衣裳いしやうべやの

かかりにいいつけて、いちばん上等な着物を、いそいで持って来て、カラバこうしやく侯こうしやく爵かくにお着せ申せ、とおっしゃいました。

王様は、侯こうしやく爵かくをたいへんていねいにもてなして、ごじぶんの、りっぱな着物を着せました。ところで、猫吉の主人は、生まれつきりっぱなようすの男でしたから、その着物を着ると、いかにも侯こうしやく爵かくらしい上品なひとがらになりました。それを見た王様のお姫ひめさまは、すっかり侯こうしやく爵かくがすきになりました。そこで、王様は侯こうしやく爵かくにすすめて、馬車に乗せて、いっしょに旅をすることになりました。

猫吉は、じぶんのけいりやくが、うまくあたったので、だいたくいで、馬車よりも先へあるいて行きました。すこし行くと、ま

きばの草を刈かっているお百姓しやうたちに出あいました。すると猫吉は、「もうじき王様が馬車に乗ってお通りになるが、そのとき、このまきはだれのものだ、といっておたずねになったら、これはカラバこうしやく侯爵のものだと、おこたえしなければいけないぞ。もしそうしなかつたら、それこそ植木鉢うえきばちにはえたちいさな草を引っこ抜くように、おまえたちの首を、引っこ抜いてしまふぞ。」といつて、すっかりお百姓しやうたちを、おどしつけました。

王様が、やがてそこを、お通りかかりになりますと、なるほど猫吉のおもつたとおり、このまきは、だれのものだ、とおたずねになりました。けれどもお百姓しやうたちは、すっかり猫吉におどかされていましたから、

「わたしどものご主人、カラバ侯こうしやく 爵さまのものでございます。  
。」と、みんな声をそろえて、こたえました。

王様は、うまうまと、だまされておしまいになりました。そして、侯こうしやく 爵にむかつて、まじめにおよろこびをおっしゃいました。

「どうもたいした土地とちもちでおいでだな。」

そこで侯こうしやく 爵は、すかさず、そのあとについて、

「ごらんのとおりに、このまきばからは、まい年、なかなかたくさんな取りいれがございますので。」と申しました。

## 四

まずこういうやり方で、猫吉親方おやかたは、いつも馬車の先に立つてあるいて行つては、麦刈り、草刈りをしている男とみると、おなじようなことをいって、おどしました。

「王様がお通りになつたら、これはみんなカラバ侯こうしやくの畠でございませうというのだ。そういわないと、おまえたちみんな、挽ひき肉にしてしまふぞ。」

そういつてあるいたあとに、すぐ王様は通りかかつて、麦畠も、牧場まきばもみんなカラバ侯こうしやくのものだときかされました。そのたんびに、王様は、カラバ侯こうしやくが、たいへんな広い領地りょうちをもっているのに、すっかりびっくりしておしまいになりました、そ



うしてそのたんびに侯爵こうしゃくにむかつて、

「どうもたいしたご財産ざいさんで。」といいました。

このあいだに、猫吉親方は、ひとりさききに、どんどんあるいて行つて、とうとう人くい鬼が住んでいる、りっぱなお城へ来ました。この人くい鬼は、世にもすばらしい大金持で、王様が、みちみち通つておいでになつた、カラバ侯爵こうしゃくのものだといふ広こうだ大な領地りょうちも、じつはみんな人くい鬼のものでした。猫吉は、

この人くい鬼のことをよく聞いて知つていましたから、そのとき、ずんずんお城の中へはいつて行つて、

「ご近所きんじよを通りかかりましたのに、あなた様のごきげんもうかがわずに、だまつて通る法ほうはございませんので、おじやまにあが

りました。」と、さも心から、うやまつているように申しました。それを聞いた人くい鬼は、すっかり喜んで、人くい鬼そうおうなれいぎで、猫吉をもてなしました。

さて、ゆつくり休ませてもらったところで、猫吉は、おそろおそろ、

「あなた様は、ごじぶんでなろうとおもえば、どんなけもののがたにもおなりになれるのだそうでございますが、それでは、しとかぞうとかいったような、あんな大きなものにもおなりになれるのでございますか。」と、たずねました。

すると、人くい鬼は、早口に、

「なれなくってさ。なれなくってさ。よしよし、うそでないしよ

うごに、ひとつ、ししになって見せてやろう。」

こういって、いきなりししになってしまいました。猫はすぐ鼻のさきに、大きなししがふいにあらわれたので、あわてて、長ぐつのまま、あぶないもこわいもなく、軒のきのかけひの上にかけてあげられました。しばらくたつて人くい鬼が、やつと、もとどおりのすがたになったのを見すまして、猫吉はそろそろ、かけひからおりて来ました。

「どうも、じつに、おどろきました。わたくしは、今にもひとつかみになさるかと思つて、ぶるぶるふるえていたのでございますよ。ところで、これも人から聞きました話で、あてにはなりません、あなたが、あなたはまた、ずっと小さなけもの、たとえばねずみなら、

はつかねずみのような小ねずみなんかにも、なろうとおもえばおなりになれるということですが、まさかねえ、こればかりは、とても信じられません。」

こういつて、猫は、うたがいぶかいような目をしました。

「なに、信じられん。」と、人くい鬼はおこつてさげびました。

「よしよし、すぐ小ねずみになって見せよう。」

人くい鬼は、いうまに、一ぴきのはつかねずみにかわつてしまいました。そして、ちよろ、ちよろ、床ゆかの上をかけまわりました。猫吉はしめたというなり、すばやく、小ねずみにとびかかるが早いか、あたまから、むしやむしやと、たべてしまいました。

## 五

そのとき、お城のそとのつり橋を、王様の馬車のわたつてくる音がきこえました。猫吉は、その音を聞きつけると、さっそく、お城の門のところへ出て行って、王様にこう申しました。

「さあ、どうぞ、王様には、カラバこうしやく侯爵のお城におはいりくださいますよう。」

王様は、さつきからこのお城に気がついていました。そして、だれのお城だか知らないが、中はさぞかしりっぱだろうから、はいつてみたいものだど、おおもいになつていたところでした。ですから、猫吉がそういうのを聞くと、ますますおどろいておしま

いになりました。

「なに、これも 侯こうしやく 爵やくのお城。いやどうも、お庭といい、建たて物ものといい、こんなりっぱなお城は見たことがないわい。では、  
 拝見はいけんしよう。どうぞ案内あんないをたのみますぞ。」

王様が馬車からおりると、猫吉は、そのあとからついて行きま  
 した。カラバ 侯こうしやく 爵やくはお姫さまに手をかして、そのあとにつづ  
 きました。やがて大広間にはいると、おかざりしたテーブルの上  
 に、りっぱなごちそうがならんでいました。じつは、このごちそ  
 うは、きょう、たずねて来るはずの友だちのために、人くい鬼が  
 したくしておいたものでした。けれども猫吉は、それがわざわざ、  
 王様やお姫さまのために用意させてあったもののように見せかけ

ました。人くい鬼の友だちも、王様がおいでときいて、えんりよして、かえつて行きました。

やがて、みんなはテーブルについて、ごちそうをたべました。

王様は、お姫さまひめとどうよう、侯爵こうしやくのりっぱなひとがらに、

すっかりほれこんでおしまいになりました。そのうえ、侯爵こうしやく

が、たいへんお金持なのを知つて、なおなお、このもしくおもい

ました。そこで、五六ぱい、さかずきをあげてから、王様は、

「どうぞでしょう、侯爵こうしやく、おいやでなかつたら、姫と結婚けっこんし

てくださいませんか。あなたは、わたしどもにとつては、申しぶんのない方です。」と、いいました。

侯爵こうしやくはそのとき、うやうやしく敬礼けいれいしたのち、王様の申

し出された名誉めいよを、よろこんで、お受けすることにしました。そうしてその日、さつそくお姫さまと結婚しました。

さて、猫吉は、大貴族だいきぞくにとり立てられました。それからもう、やたらにねずみを取ったりしないで、気らくに、その日その日をおくりました、と、さ。

親ゆずりの財産ざいさんに、ぬくぬくあたたまつているよりも、若いものは、自分の智慧ちえと、うでを、もとでにするにかぎります。







# 青空文庫情報

底本：「世界おとぎ文庫（イギリス・フランス童話篇）妖女のおくりもの」小峰書店

1950（昭和25）年5月1日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2006年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 猫吉親方

またの名 長ぐつをはいた猫

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 ペロー Perrault

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>